



もきわめて近い。いずれも江戸時代の遺跡で、金沢城下町の北西端に位置する。

第二・三次調査では、水田とその下層に隙間なく掘り込まれた粘土採掘穴、大小の用水路、井戸、建物が検出された。遺物は、陶磁器をはじめ、木製・土製・石製・金属製・ガラス製の日用雑貨があり、ほとんどが用水路と包含層から出土した。一八世紀から一九世紀末のものが多く、上限は一七世紀、下限は一九世紀である。木製のうち容器・刷毛・札状のもの計七九点に墨痕や墨書が、容器二点に朱書が、板状の一点に墨描きの文様がある。

木簡が出土した遺構と点数の内訳は左記の通りである。第二次調査では粘土採掘穴ではない土坑(ゴミ穴)SK一〇(二点)、小規模な用水路SD〇二(一三点)。うち一点は朱書)、SD〇三(九点)、SD〇四(五点)、SD〇一・〇三の合流部(一七点)、SD〇二・〇四合流部(一点)、遺物包含層(一八点)の計六五点、また、第三次調査では、SD〇三(二点)、大規模な用水路SX〇一(一三点)。うち一点は朱書、遺物包含層(一点)の計一六点、総計八一点である。木簡の時期は一九世紀を主体とし、一部明らかに近代に降るものも含まれる。このほかにも漆器への金文字や磁器への漆書き、あるいは焼印のみの資料など文字資料は多数出土しているが、ここでは墨書のあるもののうち文字を判読できる四二点を紹介することとする。

## 8 木簡の釈文・内容

### 一 第二次調査

#### 土坑SK一〇

(1) 田内 石田屋 鍛冶 女 松 屋善七 新屋清右衛門 今屋佐兵衛 仲勘右衛門 能登屋善助 村六十郎

「 屋佐兵衛 や弥吉 白尾や平次郎 屋母 屋三右衛門 新屋小右衛門 新屋助 泉や孫助 屋善七 屋」

(81)×182×7 081

(2) 「(焼印・印) 光寺前 入口屋 与三郎」

104×33×7 011

用水路SDO二

- (3) 「梅 (墨書部分ヲ陰刻シ朱墨デ填墨) 縦67×横4.5 061
- (4) ・「御□」  
・「正」 37×28×1.5 021
- (5) ・「イ  
。イ  
九」
- (6) ・「鑑□」  
・「荒  
河□」 52×44×8 021  
(46)×(37)×8.5 065
- (7) ・「□  
ち□□」  
・「天三 十二十二」 (112)×(25)×2 019  
(朱書)  
「矢田」(文字ノ周囲ヲ楕円デ囲ム) 縦127×横1 061
- 用水路SDO三
- (9) ・「○宗立」  
・「○仲間連」 (焼印)  
62×21×3 011

(10)

・「米□□  
□□」

・「六月□□日」

138×31×7 011

(11)

・「加賀国金沢堀川角場町居住  
鍛冶町  
安江八幡  
安政四年□  
(上部ニ朱方印「安江／八幡社」アリ)

・「明治六年□月  
祠官

有岡益

祠掌

葛城慎

(朱印)  
(朱印)

90×60×4.5 011

(12)

・「  
□□  
□□」

・「山  
□□  
□□」

117×59×5 061

用水路SDO四

- (13) 二十一 (曲物側板) (267)×25×2 061
- (14) 二十一 (曲物側板) (272)×25×3 061
- (15) ・「米米」  
・「□□□」 (142)×18×4 059

用水路SD〇二・〇三合流部

- (16) 一八十巻 □ (曲物側板)  
(275)×28×1 061
- (17) 「水亀」  
従104×厚7 061
- (18) ・「第一二七二号  
巻合  
シ」
- (19) ・「大」  
(焼印)  
・「△」  
44×32×5 021
- (20) ・「。草履札  
白井少三郎」  
47×33×4 021
- (21) ・「。夜」  
49×45×10 061
- ・「田丸町専光寺筋  
越桐与兵衛様  
糸印  
素麵  
五印入」  
162×46×7.5 011
- ・「金田 駄  
七月廿二日  
(焼印)」

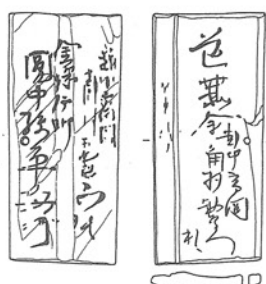
(22) ・「天保十己亥」

・「□□□」

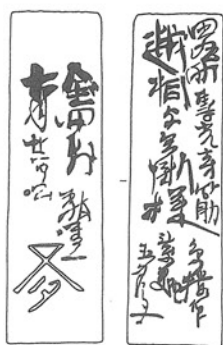
147×(74)×9 061

用水路SD〇二・〇四合流部

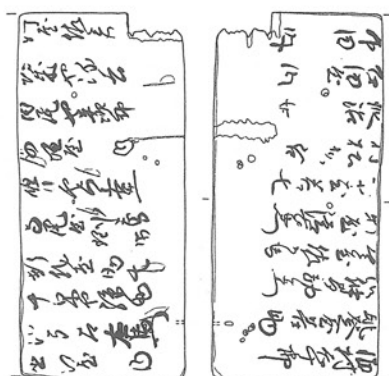
- (23) ・「□□□□□□□□」  
「子二月十二日  
馬□□  
嘉□□」  
120×49×8 011
- 包含層
- (24) ・「。ゐ九」  
55×36×5 021
- (25) ・「。三十三」  
92×(32)×6 081
- (26) ・「。三十三」  
・「[入口]「□□屋芳」(裏面ニ墨点アリ)」  
75×30×4 011
- (27) ・「。大大大」  
・「。□□□□□□□□」  
131×42×6 019



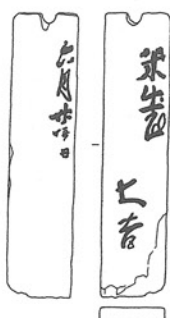
—(28)



—(21)



—(1)



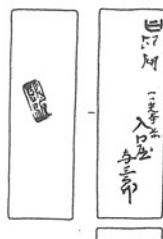
—(10)



—(15)



—(7)



—(2)



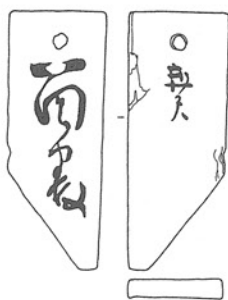
—(26)



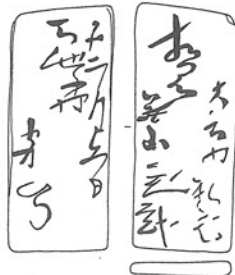
—(19)



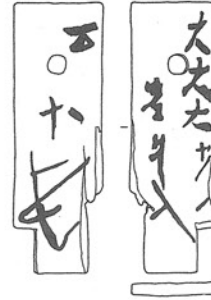
—(4)



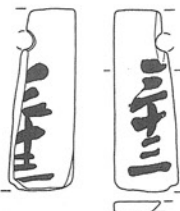
—(29)



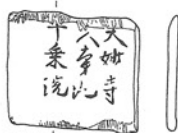
—(23)



—(27)



—(25)



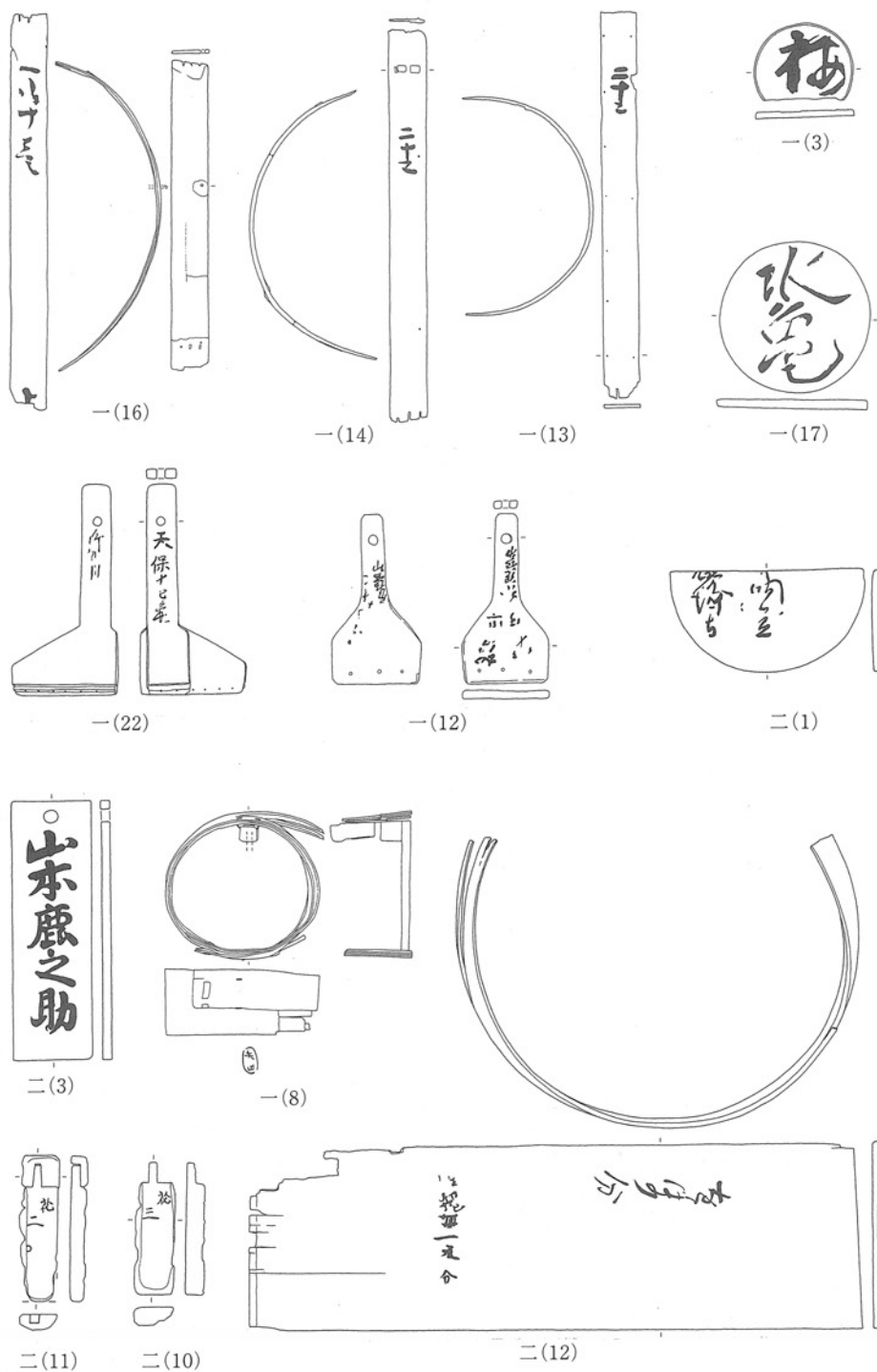
—(30)



—(24)



—(5)



(28)

・「芭蕉□ 越中高岡  
角村勘右衛門  
札」

大溝S X O 一

(3) 「○山本鹿之助」

180×55×6 011

・「越中高岡  
角村勘右衛門□  
金沢片町  
円中孫平□□□□」

124×55×7 011

(4) ・「○□□」

・「○□□」

60×40×6.5 021

(29)

・「○□尺」

125×48×9 051

(5) ・「横井」

・「十月吉日」

63×22×4 021

(30)

大妙寺  
久遠院  
十乗院

(39)×(63)×4.5 081

(6)

「□□本  
□□□」

55×(30)×5 081

二 第三次調査

溝S D O 三

(1)

□納豆  
□濟寺」

徑133×厚6 061

(2)

・「大工  
○福村辰三郎」  
(刻印)  
・「○□□」

75×38×8 021

(7)

・「生国加賀金沢田丸町居住  
河原市屋□□男  
安江八幡社氏子 河原鉄太郎  
□□年正月六日出生  
(上部ニ朱方印「安江／八幡社」アリ)

・「 祠官 (朱印)  
有岡益友

祠掌 (朱印)  
葛城慎吾

明治六年六月

91×61×5 011

(8)

・「加賀国金沢長田町  
橘 □□ (朱印)  
」

91×(16)×4 081

第二次・第三次両調査出土木簡には互いに関連するものがあるの  
で、一括して紹介することとする。

一(1)は歴名板である。欠損している上部以外は整形されており、  
両面とも一〇家一〇人または一一人、合計二〇家二一人の名が列記  
されている。

一(11)は、二(7)(8)とともに氏子札と考えられる。法量が酷似してお  
り、規格性が高い。氏子札とは、一八七一年の戸籍法により、住民  
を神社の氏子として登録させ、神社からその証明として発行したも

(9)	・銀将	(25)×23×8	061
	・金		
(10)	「花 三	92×27×13	065
(11)	「花 二	102×26×11	065
包含層			
(12)	をはか分		





のである。二(7)はほぼ完形である。中央に大きく書かれた「河原鉄太郎」について、左に誕生日が、右一行目に住所、二行目に戸主との続柄が書かれている。上部の墨書と朱印から安江八幡社の発行とわかり、裏面に神官二名の署名がある。安江八幡社は江戸時代以前は安江郷の総社で、当遺跡の南東、城の北東に鎮座していたが、江戸時代初期に村地ごと北西に移っており、その結果、当遺跡の南に近接することになった。一(11)も同じく安江八幡社発行のもので、法量や書式がほぼ同じである。右二行目の戸主とその続柄を示す欄に地名が書かれていることから、堀川角場町の住人某は、鍛冶町在住の某から分家したものと考えられる。そうであれば、二(7)は田丸町町内で分家したため、戸主の住所は記述を省略したとも考えられる。二(8)は欠損している。長田町在住の某の氏子札で、裏書きの神官の苗字が橘であることから、おそらく長田神社（現長田菅原神社、当遺跡の南西、城下町の西部）が発行したものであろう。

一(20)は草履の持ち主を示す草履札である。将棋の駒形の薄板に一孔をあけ、表面に大きく「草履札」と名前「臼井少三郎」が書かれ、裏面に苗字の「ウスイ」を組文字にした記号のようなものが書かれている。草履札の類例としては本町一丁目遺跡出土の方形のものがあり、表面に「草履札」、裏面に名前が書かれている（本誌第二七号）。

一(22)は刷毛に年号が書かれたもので、天保一〇年（一八三九）を

表している。金沢市では本町一丁目遺跡でも刷毛に「文政十年」（一八二七）と記された例がある（本誌第二七号(3)）。但し、「寛政」は「文政」の誤植。

一(30)は上部が欠損している。日蓮宗の寺院名が列記されている。

二(1)は曲物の蓋である。一行目は「浜納豆」であろう。曲物に「浜納豆」と記す例は、報告書作成時点で金沢市内に二七例ほどあり、送り主はすべて寺院である。二行目は上部が欠けているので一文字は判読できないが、二文字目が「済」で金沢市周辺にある寺院は、現在金沢市にある廣済寺しかない。廣済寺は浄土真宗の寺で、江戸時代以前は今の金沢城にあたる山崎山にあり、金沢御堂の中心的存在であったと伝えられる。その後、安江町（当遺跡の南東、城下町の北西部）に移り、さらに寛永一四年（一六三七）に扇町（当遺跡の南東、城下町の南東部）に移り現在に至っている。

#### 9 関係文献

金沢市埋蔵文化財センター『木ノ新保遺跡Ⅱ』（金沢市文化財紀要二一九、二〇〇五年）

（前田雪恵）